

『シン・別府学』Vol.2

植松三十里「油屋熊八とその仲間」

2020年5月から2021年1月まで、大分合同新聞で小説「万事オーライ油屋熊八物語」(2001年8月PHP研究所から単行本化)を連載した植松氏が、当時の取材をもとに油屋熊八とその仲間まつわるエピソードについて講演しました。

植松氏は初めて別府を訪れたとき、JR別府駅前で油屋熊八翁のブロンズ像を見て「面白い銅像が立っているな」と思い、同じポーズで写真を撮ったそうです。それまで熊八のことは全く知らなかったそうですが、帰宅後に調べて、その功績が全国的には知られていないことに驚き、「ぜひ彼を題材に小説を書かせて欲しい」と新聞社に相談しました。

「万事オーライ油屋熊八物語」は、熊八の生涯を決して順風満帆なものではなく、仲間とともに多くの困難を乗り越えてきたものとして、そのプロセスを描いています。それは熊八を「郷土の偉人」ととどめることなく、多くの人に共感してもらいたいという植松氏の思いからでした。

油屋熊八は文久3年、宇和島の米問屋に生まれます。米の価格が激動した時代に米相場で財を成し、株の投資で大成功をおさめます。そして明治21年、25歳のときに宇和島藩の家老の娘ゆきと結婚。翌年に宇和島の町会議員に立候補し、当選します。28歳で大阪に出て経済記者になりますが、その知識や情報をもとに30歳で株式の仲買人に転身します。その紆余曲折の人生を、植松氏は「回り道に見えても無駄なことはない」と語ります。

その後、日清戦争後の動向を見誤り財産を失った熊八は、34歳でサンフランシスコに渡ります。このとき別府の亀の井旅館の初代女将、亀井玉枝に渡航費を借り、妻のゆきを旅館に預けて行きます。そこでゆきは後年旅館を興す際のノウハウを学びます。

3年ほどのアメリカ滞在の間に洗礼を受けてクリスチャンになり、1900年37歳で帰国すると、熊八はまた株式投資を始め「油屋将軍」と呼ばれるまでに成長しました。その後、日露戦争で再び全財産を失います。

48歳で亀の井旅館の看板を亀井玉枝から譲り受け、妻のゆきとともに旅館を開業します。熊八のこだわりで、この旅館では酒類の提供はしませんでした。「禁酒法の時代に渡米した彼は、飲酒に対する罪悪感があったのでしょうか」と植松氏は推測します。また、一説には亀井玉枝は熊八の愛人だったと言われていますが、旅館を「譲った」

という記録から、植松氏は玉枝を年配の女性と仮説して小説に描いたそうです。

大阪・別府間を結ぶ豪華客船『紅丸』の就航、日豊本線の開通、別府駅開業など、当時の別府は発展の只中にありました。このころ、熊八が棧橋造成や流川通り拡幅を呼びかけたというのは有名なエピソードです。これを機に、熊八の名は別府で知られるようになっていきました。

大正8年、熊八は梅田凡平、原北陽、宇都宮 則綱と出会い、『別府宣伝協会』や『御伽倶楽部』の活動をともにし、観光や児童文化の振興にも努めます。

熊八が60歳のとき、陸軍からの依頼を受け、欧州から視察に訪れる軍人を受け入れるために、当時、閉鎖されていた洋式ホテルを一時的に再開します。このホテルでは東京から料理人を招き、洋式のサービスを取り入れました。翌年、その経験を活かして『亀の井ホテル』を開業。以降、渡米経験で養った語学力を活かし、インバウンド集客にも尽力します。

昭和2年、新聞社の企画で「日本新八景」の公募がおこなわれると、熊八は官製はがきを大量に購入して配布し、組織票を得たと語られています。

「日本新八景」は、まず人気投票でトップ10を選出し、覆面審査員による現地調査を経て、順位が決定します。昭和2年の「日本新八景」の温泉部門で、別府は人気投票の時点では10位でしたが、覆面調査で一躍1位を獲得しました。これについて植松氏は「別府の魅力は来ればわかるということを表している」と考察します。

別府が1位に選ばれたことを宣伝するため、熊八は水上飛行機をチャーターし、大阪上空からチラシをばら撒いたそうです。その様子が新聞に掲載され、宣伝活動の効果はさらに拡大しました。

昭和4年の「中外産業博覧会」の開催に向け、その前年に熊八は亀の井自動車を起業し、地獄めぐりのバスツアーをスタートさせました。その車中で若い女性が七五調の歌うような節回しでガイドをすると、それが評判になり、ポリドールからレコードも発売されたそうです。

昭和5年、熊八は「世界ホテル業者大会」に参加するためアメリカに渡ります。ところが、その2ヶ月後に梅田凡平が39歳の若さで急逝します。その翌年、北陽は別府を去りました。「原と熊八は、凡平を介して繋がっていたのでしょう」と植松氏。

昭和6年、働き者の証である掌の大きさを競う「全国大掌大会」を開催します。この審査員には、与謝野鉄幹・晶子夫妻を招きました。滞在中に彼らが詠んだ歌は歌集に

まとめられ、それが話題となり、別府の名をさらに広めていったといいます。しかし、満州事変を境に景気が悪化し、経営も苦しくなっていきます。

ちょうどその時期、熊八は69歳で青山陽という女性との間に第一子、正一を授かります。

植松氏は生前に油屋正一氏に会ったときのことを次のように語りました。「正一さんは生母のことは一切知らないとおっしゃっていました。高知で育った正一さんは、物心ついたときに自分の出自を知って以来、油屋を名乗るようになったそうです。大阪に後見人がいて、高知の育ての親に養育費が支払われていたそうです。生後まもなくに撮影された写真の裏には、福井県の写真館のスタンプが押しあてられていたようですが、詳しいことはわかりませんでした。後年、生前の熊八を知るかつての従業員に会うと「社長にそっくり」と驚かれたそうです」

正一誕生の翌年、熊八とゆきは満州旅行に行きました。仲直りのための旅行だったのでしょう。そしてその翌年の昭和10年に、熊八は71歳で脳卒中のため他界しました。その頃には全財産を町のために使い果たしていたといいます。その功績を称え、昭和28年に別府公園に記念碑が作られ、平成19年JR別府駅前にブロンズ像が建てられました。

植松氏は、これまで述べてきた人物の他に、バスの整備士として別府に招かれ、のちに亀の井ホテルと亀の井自動車の株式会社化の際に重役に就任した杉原時雄、日本初のバスガイドの1人である村上アヤメ、東洋軒の料理長・宮本四郎、亀の井ホテルに看護師として勤めた安武ノブらを熊八の仲間としてリサーチしたそうです。

「熊八さんは、人を見極める目を持っていたんだと思います。このほかにも大勢いたと思われる仲間たちは、「みんなで楽しく」という熊八さんのお人柄に賛同して付いてきたんだと思います」と植松氏。

最後に、植松氏は「別府はレトロな街並みに若い世代の活動も根付く、珍しいタイプの温泉街。これからも、ここにしかない魅力や可能性を活かして進んでいってほしい」と別府市の未来に向けてエールを送りました。